

聖書：ヨハネ 20：24～31

説教題：信じる者になりなさい

日時：2020年4月12日（イースター朝拝）

私たちは今朝、主の復活を覚えてイースター礼拝をささげていますが、このイエス・キリストの復活は最初から信じやすい話ではありませんでした。イエス様のそばで3年間過ごしたあの12弟子たちでさえ、初めはなかなか信じなかったことが新約聖書に書いてあります。中でも「私は決して信じません！」と意固地になっていたことで有名なのが、今日の箇所に出て来るトマスです。彼はイエス様が復活した日、他の弟子たちと一緒にいませんでした。そのためイエス様がその日、弟子たちが集まっていた部屋に現れた時、トマスはイエス様にお会いできませんでした。そこで彼は他の弟子たちから「私たちは主に会った」と後から聞かされますが、私はそれを信じないという態度を取ります。彼の言葉が25節にこう書いてあります。「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません。」他の弟子たちがトマスに「私たちは主を見た」と「言った」という言葉は、繰り返してそう言い続けたという時制で書かれていますので、彼らは何度も何度もトマスに告げたようです。しかしトマスは頑としてそれを受け付けませんでした。なぜそのような態度を彼は取ったのでしょうか。

これはある部分で彼の性格と関係していたかもしれません。ヨハネの福音書には、この他にトマスは2回出て来ます。1回目は11章16節。ユダヤ人がイエス様を石打ちにしようとしているのに、ラザロを生き返らせるため、イエス様がユダヤへ行こうとされた時、トマスはこう言いました。「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」ある意味で勇壮、しかし一方では物事を悲観的に見る傾向がある彼であったことが伺えます。もう1回は14章5節。最後の晩餐の席上でイエス様が「わたしはあなたがたのための場所を用意しに行くのです。・・・その道をあなたがたは知っています。」と言った時、トマスはすかさずこう言いました。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」ここにも物事を否定的に暗い方向から考えがちな彼の特徴が現れているかもしれません。しかし先に触れましたように、復活の知らせを聞いてもすぐ信じなかったという点は他の弟子たちと同じでした。女たちが復活の事実を告げても、12弟子たちはたわごとと思って相手にしませんでした。ですからトマスだけを「疑い深いトマス」などと呼ぶのは公平ではない

と思います。彼だって一週間前に他の弟子たちと一緒に部屋にいたら、同じようにイエス様を信じ、受け入れていたことでしょう。トマスがこれほど強く「私は決して信じない」という態度を取ったのは、やはりそれだけ彼が落ちた絶望が大きかったからではないでしょうか。彼はイエス様にすべての希望を置いて従って来ました。そのイエス様が十字架にかけられて死んだ時、彼は自分の望みのすべてが打ち砕かれたのです。人生の土台が根本から崩されたのです。そんな時、誰かと一緒にいて自分が支えられることを好む人もいますが、一方には一人でそのことに向き合い、乗り越えようと格闘する人もいます。トマスはそういうタイプの人だったのかもしれませんが。そこで最初の日曜日は他の弟子たちと一緒にいなかった。そんな彼が弟子たちのところに戻って来ると、仲間たちはみんな「主はよみがえった」と言うのです。トマスにとって、それはとても容易には信じられない。そんなことで心と体がまたかき乱されたくない。そこで他の弟子たちが繰り返して「私たちは主を見た」と言うたびに、彼は益々「私は決して信じない。その手に釘の跡を見て、そこに指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ。」と態度を固くしたのではないのでしょうか。

そんな彼らのところにイエス様が再び来られます。26 節に「八日後」とあります。ユダヤではその日も含めて数えますから、これは一週間後ということになります。このように主が復活した日曜日ごとに弟子たちに現れたことが、今日キリスト教会が週の初めの日曜日に集まって礼拝をささげることの基礎になりました。トマスはここでイエス様に会い、イエス様を信じる者となります。ここでのイエス様について私たちは3つのことを見ます。

まずイエス様は彼らの真ん中に立って、「平安があなたがたにあるように」と言われました。これは 19 節に記されている一週間前と同じ言葉です。そしてこれこそ復活されたイエス様が私たちに与えてくださる中心的な祝福です。「平安」という言葉はご存知のように、聖書言語においては「平和」という言葉と同じです。そしてここで考えられている平和は、何よりも「神との平和」です。生まれながらの私たちは、罪のために、この真の平和を持っていません。神との平和の関係にないため、心の平安がありませんし、神から来る本当の祝福もない。しかしイエス様の復活は何よりもこの平和、そして平安を私たちにもたらしてくださるものです。イエス様はそれを何度でも言ってくださいます。弟子たちに現れるたびに繰り返して「平安があなたがたにあるように」と言って、この祝福を宣言してくださるのです。

二つ目にイエス様はその平安の基礎をここでも示されます。それは十字架にかかられたご自身の姿です。一週間前の 20 節においてもそうでした。なぜイエス様は神との平和を私たちにもたらすことができるのか。それはイエス様が私たちの身代わりにさばかれてくださったからです。私たちの代わりにとてつもない犠牲を払ってくださったからです。私たちのために十字架にかかって苦しめられたイエス様のその傷跡を見る時に、私たちはイエス様にあつて自らの罪の赦しを確信し、また神との平和に生かされていることを確信することができるのです。

そして3つ目に今日の箇所の特徴的なことはイエス様が特にトマスに向かってくださったことです。27 節：「それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。』」 何というイエス様の優しいおことばでしょうか。本来イエス様はトマスを叱責してもおかしくなかったと思います。わたしは前々から復活について教えていたはずではないか。また他の弟子たちがあなたに何度も話したはずではないか。なのに「決して信じない」などという態度を取り続けるとは何という不信仰者かと。しかしイエス様はそうされません。イエス様は彼の要求に合わせるかのようにして、へりくだって十字架にかかられたご自分を示して行かれます。忍耐し、彼の弱さを慮って、彼に仕えてくださいました。そして合わせて考えに入れるべきは、イエス様はどうやってこのトマスの要求を知ったのかということ。25 節のトマスの言葉はイエス様がいない場所で語られたものです。ですからイエス様は聞いていないはず。ところがイエス様は全部ご存知で、トマスに対して「あなたの指をここに当てなさい。あなたの手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい」と仰る。驚くべき全知全能のお方です。その方が、こんな失礼な言い方をした私の要求一つ一つに答えてくださっている。そしてイエス様は言われました。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」 これもトマスの「決して信じません」という言葉に合わせた言い方です。そのような者にならないで、信じる者、信じて歩む者となりなさいと優しく招いてくださった。トマスが信じることができたのは、主がこのようにへりくだり、忍耐深く関わってくださったからです。十字架上でご自身をささげてくださいました方が、その傷跡を示しながら、信じる者になりなさい！と語りかけてくださったからです。私たちもそうです。私たちの決心、私たちの力によって信じたのではなく、主がこれと同じように私たち一人一人に迫ってくださったからではないでしょうか。

果たしてトマスはこれにどう応答したでしょう。彼はイエス様の脇腹に手を伸ばして入れてみたとは書いてありません。おそらくそうはしなかったと思います。そうする必要はもうなかったのです。彼は目の前に現れて、このように語りかけてくださったイエス様の恵みに圧倒されたに違いありません。そして「決して信じない」と宣言していた彼から最高の告白が出て来ます。このヨハネの福音書の頂点とも言える言葉です。28節：「トマスはイエスに答えた。『私の主、私の神よ。』」

トマスはまず「主」と告白しました。ギリシャ語の「キュリオス」というこの言葉は広い意味で使われる言葉で、どんな主人に対しても使い得る言葉です。軽い儀礼的な意味から深い意味まで持つことができる言葉です。ここではもちろん深い意味での使い方でしょう。これは自分の主として、すべてをささげる方ということです。ここにキリストを信じるとは、この方を主として従うことであるということを改めて覚えさせられます。時々、イエス様を信じますと告白することと、実生活でイエス様に従うことを別の事柄のように捉えている人もいますが、そうではありません。キリストを信じるとはキリストを主として、この方に自分をささげて従う生活をすることを意味します。

二つ目にトマスは「神」と告白しました。ここにイエス様が神であることについての聖書のはっきりした証言があります。確かにこれはトマスの言葉です。しかしイエス様はこれを否定せず、受け入れておられます。トマスは死者の中からよみがえったイエス様に接した時、ここにおられるのは神ご自身以外の方ではあり得ないと悟りました。ただの人がこうしてよみがえるはずはない。このヨハネの福音書は冒頭の1章1節から、イエス様が神であることを強調して来ました。その福音書のクライマックスの告白が、ここになされたのです。そしてこの方が神であられるからこそ私たちの救いはあるのです。神である方が人となって十字架上でささげてくださった犠牲であるからこそ、それはとてつもない値を持ち、限りなく多くの人を救う力を持つのです。

そしてもう一つ注目すべきはトマスがこれらの言葉に「私の」という言葉を付けたことです。「私の主、私の神よ」と。これはイエス様との個人的な関係を示す言葉です。この告白は他人事であってはならないのです。私にとってどうなのかということが決定的に大事です。トマスのように「私の主、私の神よ」と告白する時に復活のイエス様が勝ち取ってくださった素晴らしい救いはその人のものになるのです。

最後にイエス様はトマスにこう言われました。29 節：「イエスは彼に言われた。『あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。』」これはどういう意味でしょう。トマスはイエス様を見て信じましたが、これではいけないということなのでしょう。見ないで信じる方が素晴らしいということでしょうか。イエス様はそのように「見て信じること」と「見ないで信じること」を比べて、どちらが勝っているかというような言い方はしていません。見て信じることがダメなら、これまでイエス様を見て信じて来た多くの人はみなダメな人々になってしまいます。イエス様はそのように言われたわけではないと思います。ただイエス様はトマスの告白を聞きながら、これからは見ないで信じる人たちの時代が来るということを取って見ておられたのです。イエス様はこれから天に昇ります。ですからイエス様を目で見て信じることはできなくなります。では見ないで信じるとは具体的にどうすることでしょうか。その方法は続く 30～31 節を見ると分かります。「イエスは弟子たちの前で、ほかにも多くのしるしを行われたが、それらはこの書には書かれていない。これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。」ここに、「見ないで信じる」とは何にもよらずに信じるのではなく、「御言葉を通して信じる」ことだということが示されています。目で見てイエス様を信じる方法もイエス様が地上にいた間は存在しましたが、目で見なくても聖書の御言葉を通してイエス様を十分に信じていのちを得ることができる。これがこの後、イエス様が天に昇って行かれてからの方法なのです。それは見て信じるあり方に少しも劣らないのです。むしろイエス様は「見ないで信じる人は幸いです！」とその祝福を宣言しておられます。ですから私たちはイエス様が地上におられた時代を羨ましく思う必要はないのです。私たちは御言葉を通して、トマスをこのように導かれたイエス様ご自身を、今日もリアルに、力強い仕方で知ることができ、またその生ける交わりに生きることができるのです。このイエス様が言われた「見ないで信じる幸いです」の宣言を心に留め、またその宣言を信じて、私たちは御言葉に聞き続け、そこに与えられるイエス様との交わりとその祝福に生きて行くべきなのです。ローマ人への手紙 10 章 17 節：「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」 I ペテロ 1 章 8 節：「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」

イースターのこの日、イエス様は私たちに「死が終わりではない」という世界を来た

らせてくださいました。イエス様の復活は、私たちの身代わりに十字架にかかり、死んでくださった方の復活ですから、それはイエス様のための復活というよりは私たちのための復活です。私たちはこのイエス様を通して、神との平和を与えられ、死で終わることのない永遠のいのちを持つ者とさせていただきます。私たちはこれをどのようにしたら信じることができるでしょうか。その方法は御言葉を通して今日も語っておられるイエス様に聞くことによってです。振り返ってみれば、私たちが信仰へ導かれたのも、御言葉を通して、イエス様ご自身が、今日の箇所トマスに対するのと同じように私たちにも語り掛けてくださったからではないでしょうか。色々な理屈をこね、注文を付け、自己主張していた私たちに忍耐深く、優しく語りかけ、十字架の傷跡を示しつつ、信じていない者にならないで、信じる者になるように！と働きかけてくださったからではないでしょうか。私たちは今日の記事の中に、私に対しても同じように関わってくださったイエス様のお姿を見て、イエス様に感謝の礼拝をささげたいと思います。そしてこれからも御言葉に聞き続けたいと思います。31節の「これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため」という部分には印がついていて、欄外に「信じ続けるため」という異本もあることが示されています。御言葉は最初に信じる時だけ必要なものではありません。私たちが信じ続けるため、イエス様との交わりに生き続けるためにも必要です。そしてこれから信じる方々ももちろんそうです。イエス様は「見ないで信じる者への幸い」、すなわち御言葉を通して信じる者への祝福を宣言しておられます。その御言葉において今日も私たちの前に立って語りかけてくださっているイエス様に聞いて、差し出されている復活の恵みを自分に対するものとして受け取る者でありますように。「私の主、私の神よ」と私たちもトマスのように告白して、復活の主による罪の赦し、神との平和、死に打ち勝ついのちに生きるという新しい人生に、その一歩を踏み出す者へ導かれて行きたいと思います。